まちなかの居場所が生活の質・ 地域への意識に与える影響に関する研究

川村 竜之介¹・谷口 綾子²

¹非会員 筑波大学大学院 システム情報工学研究科 (〒305-8573 つくば市天王台1-1-1)

E-mail: kawamura.ryunosuke@sk.tsukuba.ac.jp

²正会員 筑波大学大学院講師 システム情報工学研究科 (〒305-8573 つくば市天王台1-1-1)

E-mail: taniguchi@risk.tsukuba.ac.jp.

本研究は、都市空間における自宅・職場・学校以外の場所を「まちなか」と定義し、まちなかで人々に「居場所」として認知されている場所を分類し類型化すると共に、まちなかの居場所の有無と生活の質・地域への意識(地域愛着など)との関係性について明らかにすることを目的としている。具体的には、まちなかの居場所の有無や、生活の質・地域への意識に加え、既存研究を参考に作成したまちなかの居場所感を計測するためのWEBによるアンケート調査を実施した。分析の結果、特に飲食店や友人・親戚宅、図書館などが多くの人に居場所として認知されていること、居場所の有無と生活の質・地域への意識との間にはポジティブな関係があることが統計的に示された。また居場所感尺度の特徴の違いによって、まちなかの居場所を7種類に類型化することができた。

Key Words : *QOL, ibasho, place attachment*

1. はじめに

本格的な人口減少・高齢化社会の到来を迎えつつある近年、郊外化の進展や中心市街地の衰退により、住民生活の利便性低下、財政圧迫とそれに伴う公共サービスの質の低下、過度な自動車利用による公共交通の弱体化や環境負荷の増大などといった社会的問題が生じている。これに伴い、国はコンパクトなまちづくりを目標として掲げ、法改正や地方自治体への交付金交付など、様々な支援措置を通じて中心市街地活性化を推進している。国土交通省¹⁾では、中心市街地の衰退によって「人との交流やにぎわい、文化などの機能がなくなり、まちとしての魅力を失ってしまいます。」としており、中心市街地活性化の課題のひとつとして、まちの「生活空間としての魅力の喪失」を挙げている。

そのような中、「居場所」という概念が注目されている。日本建築学会²⁾では近年自然発生的に生まれている「まちの居場所」についての具体的事例を紹介している。「まちの居場所」とは、例えば、子どもの遊び場として、プレイリーダーや来園者などが運営するプレイパークや、地域住民が自由に出入りできる高齢者向けグループホーム、商店街の空き店舗を利用したフリースペースなどである。明確な定義は無いが、地域の社会的な課題を解決

しようと、地域住民や様々な組織が必要に応じて形成していった拠点であるという点では共通している。また「居場所」に近いと考えられる概念として「サード・プレイス」がある。Oldenburg³⁾は、家庭(ファースト・プレイス)や職場、学校(セカンド・プレイス)以外の場所で、人々が集い、会話を楽しむために出入りする場所を「サード・プレイス」と呼んだ。例えば、フランスにおいてはカフェ、イギリスにおいてはパブなどといった場所のことを指し、そこからコミュニティが形成され都市の魅力が高まるとしている。

このような「まちの居場所」や「サード・プレイス」といった場所が、人々と地域との関わりを持たせる場として機能し、さらには人々の生活の質に影響することで、まちの「生活空間としての魅力」を高めることにつながる可能性がある。

そこで本研究では、まず自宅や職場、学校といった日常生活の拠点となるような場所以外を「まちなか」と定義する。そのうえで「まちなか」における「居場所」に着目し、

- ・まちなかで居場所と認知されている場所
- ・まちなかで居場所と認知されている場所の有無と、生活の質、地域への意識との関係性
- ・居場所として認知する心理的要因を測る、居場所感尺

度の開発

- ・居場所感尺度の特徴による居場所の分類と、生活の質、地域への意識との関係性について明らかにすることを目的とする。

2. 既存研究と研究の方法

(1) 既存研究

都市、建築分野において「居場所」や「サード・プレイス」を対象とした研究は、主に生活の質などの観点から、オフィスワーカーの居場所を対象とした林田ら⁴⁾、児童の居場所を対象とした斎尾、長谷⁵⁾、大学生の居場所を対象とした十左近、林田⁶⁾、カフェを対象とした井川ら⁷⁾や丹羽、佐野⁸⁾などが、現状把握からその特徴や課題について整理している。また萩原、中井⁹⁾は、とくにインターネットカフェなどの複合カフェに着目し、その実態調査から、都市空間における居場所の個室化現象を都市の監視社会化、規制社会化の観点から説明している。

また「居場所」は心理的な意味の強い言葉であるため、都市、建築分野以外にも、特に心理、教育分野での研究が盛んである。

石本¹⁰⁾は、「居場所」という言葉はもともと「いどころ」「座る場所」など、物理的な意味で使用されていたが、1980年代以降、小・中学校における不登校児童の増加が社会問題化したことで、学校の「心の居場所」としての役割が注目されるようになり、徐々に心理的な意味を強調した言葉へと変化していったとしている。そのため心理、教育分野の研究は、主に学校問題の解決を目的として、小学生から大学生までを対象に、家庭や学校を居場所と捉えてものが多い。石本¹⁰⁾は、居場所に関する研究内容は、

- ・居場所の内容や分類に関する研究
- ・居場所に関する臨床事例
- ・心理尺度法を用いた研究

の3つに分けられるとしている。本研究では、この中でも特に心理尺度法を用いた研究に着目したい。

居場所に関する心理尺度は、居場所として認知する心理的要因に基づき、どの程度そこを居場所であると感じているかについて測る尺度である。田中、田嶋¹¹⁾は「居場所感尺度」、則定¹²⁾は「心理的居場所感尺度」を、それぞれ作成している。杉本、庄司¹³⁾は「『居場所』の機能を測定する尺度」を作成し、「自分ひとりの居場所」、「家族のいる居場所」、「家族以外の人々のいる居場所」それぞれの居場所の固有性について明らかにしている。石本、齋藤¹⁴⁾と石本¹⁵⁾は、「居場所感尺度」を作成し、個人属性や行動による居場所感の違いを明らかにしてい

る。中村¹⁶⁾は、杉本、庄司¹³⁾を参考に「大学生版『居場所』の心理的機能尺度」を作成し、居場所感因子がアイデンティティ確立に与える影響などを明らかにしている。このように心理尺度に関する研究は心理、教育分野で蓄積されているため、居場所の心理的側面を定量的に捉えるうえで参考になる。

都市、建築分野における既存研究は、いずれも事例調査やヒヤリング調査から実態把握を行ったものであるが、居場所の心理的側面に関する定量的な把握についてはなされていない。

以上の既存研究から本研究の位置づけを整理する。都市、建築分野においてはまちなかの居場所に着目した研究がなされているが、先に述べたように心理的側面から定量的に捉えたものは無い。一方、心理、教育分野において居場所の心理的側面に関する研究は蓄積されているものの、まちなかの居場所に着目したものは少ない。本研究は心理、教育分野でポジティブな影響があるとして着目されている居場所について、都市、建築のフィールドである「まちなか」を対象として、心理尺度を用いた定量的な分析を行うという点で新規性と有用性があるといえる。

3. 調査について

(1) まちなかの居場所感尺度の作成

本研究ではアンケート調査の結果を基に分析を行う。調査で使用するまちなかの居場所感尺度を作成するために、まず居場所感を測る質問項目を作成する。本研究では予備調査と、居場所に関する既存研究から質問項目を抽出した。

a) 予備調査

予備調査は、筑波大学公共心理研究室のメンバーの方々を対象としたブレインストーミングと、同メンバーの家族や親せき、友人の方々に対して、メールやfacebookなどでアンケート調査を依頼することで実施した。調査内容を表-1に、調査結果を表-2に示す。調査結果における「A場所」は、回答の際、必ずしも物理的な場所として捉えなくても良いということを伝えている。結果から、居場所として認知されている場所は飲食店が多く、場所の持つ機能や用途によって、居場所だと認知する理由は異なることが示された。

b) 質問項目の抽出

居場所に関する既存文献^{2), 11)-18)}と予備調査結果から質問項目を抽出した。その際、

- ・意味が同じ、または類似している質問項目のなかから、ひとつを残して削除
- ・まちなかの居場所においては、考えられない場面を

表-1 予備調査内容

調査形式	対象者	質問内容
ブレインストーミング	研究室の教員と学生(5名)	家、学校、職場以外で「居場所」だと思う場所について、 A.場所「それはどこ(どんなところ)か」
インタビュー調査	研究室の学生の親戚や友人(11名)	B.理由「なぜ、そこが居場所だと思うのか」

表-2 予備調査結果

A.場所	自宅・部屋、友人宅、車、公園、研究室、実家、地元の駅・まち、空港や鉄道での決まった席、飲食店(レストラン、カフェ、バー、マック、ドトール、豚カツ屋、松屋、)図書館、カラオケ、きれいな星が見えるところ、犬の散歩コース、多摩川、通勤途中のコンビニ、旧友との飲み会、サークル、趣味の集まり、友人との電話、twitter
B.理由	くつろげる、落ち着く、居心地がよい、楽しい、うれしい、安心する、ほっとする、おいしい、気がまぎれる、リラックスできる、疲れが取れる、仲間に会える、仲が良い、つながりを感じる、受け入れてもらえる、包み込まれるような感じ、話や相談ができる、店員さんと話せる、よく知っている、行きつけである、いつも行っていた、ずっと関わっていた、幼いころからよく遊んでいた、そこが好き、「よくいくまち」という感じ、何時間いてもいい、いついてもいい、何もすることがなくても居たい、「帰ってきた」という感じ、「自分だけの場所」という感じ、所属している、立ち位置がはっきりしている、誰にも会う必要がない、好きなことができる、解放される雰囲気、やるべきことができる、ほかのことを考えずに済む、頭の中を整理できる、周りが静か、読書しやすい、邪魔されない、眠れる、目標がある、接客がいい、素の自分になれる、快適な環境、新しい発見がある、地元食材を使っている、自然に囲まれている、タバコが吸える

表-3 調査項目

調査項目	
まちなかの居場所の有無	
まちなかの居場所について	場所
	理由
	人数
居場所感尺度	居場所についての78の質問項目
生活の質や地域への意識を測る尺度	生活満足度
	人生満足度
	地域愛着
	風土接触度
	地域疎外感

表-4 生活の質と地域への意識を測る計測指標

尺度	質問
生活満足度	「現在の生活に満足している」と思う
人生満足度	「ほとんどの面で、私の人生は理想に近い」と思う
	「私は自分の人生に満足している」と思う もう一度人生をやり直せるとしてもほとんど何も変えないだろうと思う
地域愛着	自分の住んでいる地域は住みやすいと思う
	自分の住んでいる地域は大切だと思う
	自分の住んでいる地域の雰囲気や土地柄が気に入っている
	自分の住んでいる地域にはいつまでも変わってほしくないものがある
風土接触度	地域の人々と挨拶をする機会が多い
	地域の人々と話をする機会が多い
地域疎外感	自分と自分の住んでいる地域とは一心同体だという感じがする*
	地域社会は地域の中の一人ひとりの人間関係の集合にしかすぎないと思う
	自分は自分の住んでいる地域というものをとても身近なものとして感じる*
	自分が住んでいる地域に自らをなじませるのは当たり前だと思う*
	もし、自分ひとりの利益と地域全体の利益が対立したらどちらを優先しますか*

*:逆転項目

想定している質問項目(教育現場など、特定の場面に限定している質問項目)を削除
という手順で質問項目の絞り込みを行った。表現の仕方を統一するなどして、最終的に78の質問項目を作成した。

(2) 調査設計

作成した居場所感尺度に加え、表-3のような調査項目を設定する。

a) まちなかの居場所の有無

まず、まちなかで居場所と認知している場所の有無を調べるための質問を設定した。また比較のため、自宅や職場、学校のいずれかにおいても、居場所と認知している場所の有無を調べるための質問を設定した。

b) まちなかの居場所について

まちなかで居場所だと認知している「場所」とその「理由」、そこへ行く際の標準的な「人数」についての質問を設定した。「場所」については自由記述形式で回答する形に設定し、回答例として「喫茶店、居酒屋、友人宅、マイカーの車内、図書館、公園、電車のいつもの席、海岸、ネットカフェ、twitter・・・など」と示し

ており、必ずしも物理的な場所のみを対象としている訳ではない。「理由」については予備調査から得られた回答から代表的なものを選択肢として設定した。「人数」については「1人」、「2人」、「3人以上」を選択肢として設定した。

c) 居場所感尺度

3.(1)で作成した「まちなかの居場所感尺度」78項目について、3.(2)、b)で回答した居場所について感じることを「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」までの5段階で尋ねる質問を設定した。

d) 生活の質・地域への意識を測る指標

生活の質を測る指標として、まず内閣府の国民生活選好度調査で実施されている「生活全般についての満足度」を参考に、「生活満足度（単一項目）」を設定した。また生活満足度の測定尺度として使用されるDienerら¹⁹⁾による「the Satisfaction With Life Scale」を日本語に翻訳した、角野²⁰⁾による「人生に対する満足尺度（SWLS）」から3項目を設定した。

次に、地域への意識を測る指標として、大谷、芳賀²¹⁾が作成した地域愛着に関する尺度を参考に萩原、藤井²²⁾が構成した「地域愛着尺度」のうち、構成要素である「選好」から2項目、「感情」から1項目、「持続願望」から1項目を選択して、質問項目に設定した。また萩原、藤井²²⁾が作成した「風土接触度」のうち、「地域の人々との交流」に関する2項目、また逆転項目として羽鳥ら²³⁾による「地域に対する疎外意識を量る心理尺度」を設定した。

本研究ではこれらの指標について、「人生に対する満足尺度（SWLS）」を「人生満足度」、「地域愛着尺度」を「地域愛着」、「地域に対する疎外意識を量る心理尺度」を「地域疎外感」と、それぞれの略称を使用する。各尺度の質問項目を表-4に示す。

これらの計測指標を用い、アンケート調査を実施する。

(3) 実施調査の概要

実施した調査の概要を表-5に示す。アンケート調査は、インターネットによる調査を調査会社に依頼して行った。

被験者が認知する「まちなかの居場所」の種類は、地域によって差があると考えられるため、最もまちなかに存在する居場所の種類が豊富であると考えられる東京都（23区）を対象地域に設定した。また、性別や年代については偏りが発生しないよう均等に割り付けた。

表-5 調査の概要

調査方法	インターネットによる配布・回収
調査対象エリア	東京都23区
調査実施日	2011年12月26日～12月28日
対象属性	性別、年代（20～60代）均等割り付け
サンプル数	1500サンプル（うち1478が有効）

表-6 居場所の有無についてのクロス集計

		自宅や職場、学校以外での居場所の有無		合計
		ある	なし	
自宅や職場、学校での居場所の有無	ある	714	667	1381
	なし	16	81	97
合計		730	748	1478

(4) アンケート調査の基礎集計

アンケート調査によって得られた1500サンプルのうち、質問事項に適切に答えていない可能性が高いと考えられるサンプル（全質問項目で全く同じ回答をしているもの）については除き、1478サンプルを集計・分析の対象とした。

4. 調査・分析結果

(1) 「まちなかの居場所」の有無に関する集計

a) 単純集計

まず、居場所の有無に関する回答結果を図-1に示す。「自宅や職場、学校に居場所がありますか？」という質問に対しては、ほとんどの方が「ある」と答えたが、「自宅や職場、学校以外に居場所がありますか？」という質問に対してはほぼ半分ずつに分かれる結果となった。

次に自宅や職場、学校における居場所の有無と、自宅や職場、学校以外での居場所の有無についてのクロス集計表を表-6に示す。どこにも居場所がない人や、自宅や職場、学校に居場所がないためにやむを得なく自宅や職場、学校以外に居場所を見出している人が、少数ではあ

図-1 居場所の有無

N=1478

表-7 生活の質・地域への意識を測る指標の信頼性係数と居場所の有無によるt検定

		n	平均値	t値	α係数
生活満足度	ある群	714	4.56	4.12**	-
	なし群	667	4.23		
人生満足度	ある群	714	3.77	4.97**	.83
	なし群	667	3.43		
地域愛着	ある群	714	3.62	2.40*	.86
	なし群	667	3.52		
風土接触度	ある群	714	2.63	6.80**	.90
	なし群	667	2.22		
地域疎外感	ある群	714	3.15	-4.17**	.57
	なし群	667	3.28		

両側検定

*p<.05, **p<.01

るが存在することが示された。

b) 生活の質・地域への意識を測る指標の平均値の比較

自宅や職場、学校に居場所が「ある」と答えた人の中で、まちなかの居場所が「ある群」と「なし群」に分けて生活の質・地域への意識を測る各指標の平均値をt検定により比較した。検定の結果と、各指標の信頼性係数を表-7に示す。生活の質・地域への意識を測る指標全てで有意差が見られ、まちなかの居場所が「ある」人のほうが「ない」人に比べて生活の質・地域への意識ともに高い傾向にあることが示された。

(2) 「まちなかの居場所」の種類

a) 単純集計

自宅や職場、学校以外の居場所について、「それはどこ（どんなところ）ですか？」という質問（自由記述方式）に対する結果をもとに、場所の用途の違いで分類した。図-2に集計結果を示す。

極端に度数が小さい回答や不適切な回答は「その他」として今後の分析から除外する。

最も多くの人に居場所だと認知されている場所は「喫茶店・カフェ」であり、次いで「実家・親戚宅」、「友人・恋人宅」といった他者の家、「居酒屋・バー・レストラン」「図書館」、「自動車・バイク」、「趣味・サークル・稽古事」という順になる。概ね、サードプレイ

図-2 場所の用途による集計結果

スと言われているような場所と、他人の家が多いことが示された。

(3) 「まちなかの居場所」の類型化

居場所について、用途の違いによる分類を行ったが、同じ用途の場所であっても、例えば一人で過ごす場合と複数人で過ごす場合とでは、そこを居場所として感じる心理的な要因は異なると考えられる。そこで、居場所感尺度を用いた居場所の分類を行う。まちなかの居場所について、その場所を選択した個人属性、場所の用途、空間の支配度、交流の有無で回答者を分類し、居場所感因子得点を基にクラスター分析を行う。個人属性については、性別と年代(20代～60代以上)を使用した。

空間の支配度、交流の有無については、中島ら²⁴⁾が藤竹²⁵⁾と住田²⁶⁾から作成した居場所の分類方法を参考にした。中島ら²⁴⁾は「空間の支配度」を、その人にとってその場所がどれだけ自分のテリトリー（出入りや所有物の設置、許される行為が自由な空間）であるかの度合い

表-8 パブリック or プライベートの分類方法

プライベートorパブリック	用途による居場所の分類
プライベート	1 実家・親戚宅
	2 友人・恋人宅
	3 別荘
	4 自動車・バイク
パブリック	5 喫茶店・カフェ
	6 居酒屋・バー・クラブ
	7 レストラン
	8 小売店
	9 図書館
	10 公園
	11 公共施設(図書館以外)
	12 入浴施設
	13 趣味・サークル・稽古事
	14 体育関連施設
	15 映画館・劇場
	16 レジャー施設等
	17 パチンコ等
	18 ネットカフェ・カラオケ等
	19 宗教施設
	20 電車・駅
除外	21 自然景観
	22 インターネット上
除外(一部例外有り)	23 その他

表-9 交流の有無についての分類方法

人数 「人に会いたい・話をしたい」 という質問項目への選択の有無	1人	2人以上
選択	交流有り	交流有り
非選択	交流無し	交流有り

表-10 因子分析結果

因子名		因子負荷量											
質問項目		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12 α 係数
第1因子：被害容感													
プライベートな話が出る		.99	.00	.02	-.06	-.03	.00	-.05	.01	.00	.03	.02	-.04
悩みを聞いてくれる人がいる		.98	.03	.00	-.13	-.04	.03	.01	.01	.03	-.01	-.01	-.01
自分の話を聞いてくれる人がいる		.98	-.02	.01	-.12	-.01	-.01	.00	.05	.02	-.01	.00	.01
何でも本音で話しあえる		.97	.08	-.02	.03	-.04	.01	-.02	-.06	-.02	-.01	-.01	-.03
雑談できる		.94	-.02	.02	-.03	-.04	.01	-.10	.16	-.05	.02	-.01	.02
一緒にいると安心できる人がいる		.76	-.07	.03	.00	.06	-.06	.10	.00	.00	.02	-.05	.12
自分のことをあたたく受けて入れてくれる人がいる		.71	-.08	.01	.05	.07	-.04	.03	.10	.00	-.01	-.03	.12
仲間だと感じる人がいる		.71	-.03	.00	.09	.00	-.04	.07	.15	-.01	-.02	-.11	.08
一人じゃないと感じる事ができる		.64	-.05	-.03	.10	-.03	.03	.01	.23	.09	-.04	-.01	.12
そのメンバーの気心が知れている		.58	-.10	-.01	.11	.13	.06	.05	.00	-.05	-.02	.07	.00
自分や自分たちだけの場所であると感じる		.49	.15	-.02	.33	-.08	-.04	.16	-.15	.07	-.01	.00	-.09
唯一の居場所であると感じる		.45	.23	.02	.21	-.10	.13	.13	-.15	.01	-.06	.04	-.12
第2因子：自由感													
自分の思い通りに過ごせる		.15	.85	.04	-.01	.09	-.01	-.10	-.02	-.11	.02	-.07	.03
自分だけの時間が持てる		-.05	.83	-.01	-.02	-.08	-.01	-.05	.15	.10	.00	.00	.02
自分のやりたいことをすることができる		.08	.80	-.04	.04	.18	-.03	-.01	.00	-.10	.06	-.15	-.03
誰にも邪魔されない		.01	.79	-.03	.04	-.11	.03	-.02	-.16	.02	.03	.02	.03
人と関わらなくてもよい		-.13	.72	-.12	.00	-.08	.00	.03	-.14	.07	-.03	.10	.04
ひとりになれる		-.14	.63	.05	-.10	-.29	.11	.01	.09	.24	-.03	.11	-.08
自由だと感じる		.01	.63	.09	.06	.17	-.04	-.10	.09	.03	-.01	.01	.06
まわりを気にしなくて良い		.18	.49	.10	-.05	.11	-.06	-.02	-.16	-.02	.01	.22	.07
一人でいても全く気にならない		-.25	.45	.06	.07	-.17	.06	-.05	.16	.15	-.01	.25	.06
気を遣うことがない		.00	.44	.09	-.12	.20	-.03	.01	-.09	-.03	-.02	.29	.17
第3因子：リラクセス感													
落ち着く		-.05	-.01	.97	.01	-.18	.01	.01	-.04	.05	.06	.00	-.05
安心する		.00	-.10	.91	-.01	-.10	-.01	.11	.00	.11	-.01	-.06	.02
くつろげる		.07	-.02	.84	-.12	.04	.00	-.06	-.06	-.03	.03	.13	-.09
気持ちが楽である		-.04	-.02	.82	-.04	-.01	.03	-.01	.04	.01	-.05	.01	.08
居心地がいい		-.07	.05	.82	.03	.06	-.04	-.02	.08	-.08	.02	-.07	.05
のんびりできる		.15	.07	.80	-.10	-.02	.01	-.17	-.13	.02	-.01	.12	-.15
ここにいていいと感じる		-.09	.03	.55	.09	.07	.00	.13	.09	-.07	-.03	-.01	.12
楽しいと感じる		-.06	-.04	.49	.17	.25	-.06	-.04	.16	-.18	-.02	-.08	.06
そこにいると不安が取り除かれる		.08	.10	.47	.05	-.02	.11	.18	-.04	-.01	-.05	-.22	.16
第4因子：愛着感													
思い入れがある		.08	-.13	.04	.91	-.03	-.01	-.01	-.06	.10	.02	.02	-.11
そこしかないものがある		-.03	.06	-.07	.88	-.11	.00	-.01	.01	-.09	.00	.00	.15
感動する感動したことがある		-.01	.01	-.04	.85	.03	.07	.02	-.03	-.06	-.06	-.07	-.06
ここでなければならぬという感じがする		.25	.06	-.02	.82	-.11	.05	-.01	-.11	.01	-.01	-.03	-.15
思い出がある		.15	-.15	.10	.75	.00	.00	-.01	-.07	.08	.00	.11	-.19
好きな物がある		-.08	.07	-.09	.68	.10	-.04	-.15	.11	-.09	.05	.07	.18
そこが好きだと感じる		-.09	.09	.05	.60	.11	-.07	-.06	.09	-.06	-.01	.06	.19
なじみがある		.17	-.09	.10	.45	-.19	-.04	-.02	.15	.04	.13	.20	.14
第5因子：活気													
開放的な感じがする		-.07	.10	-.05	-.09	.88	-.02	-.02	.05	.10	-.01	.03	-.07
にぎやかな感じがする		.08	-.09	-.06	-.10	.76	.05	-.07	.22	-.09	.00	.12	-.24
明るい感じがする		-.09	-.08	.00	-.06	.74	.09	.01	-.05	.02	.05	.05	.12
なごやかな感じがする		.15	-.07	.03	.02	.72	.06	-.14	-.18	.13	.01	.01	.14
いろいろな活動がある		.01	.07	.01	.07	.72	-.01	.26	.03	.04	-.02	.01	-.50
あたたかい感じがする		.16	-.13	.04	.03	.70	.05	.10	-.17	.09	-.01	.08	.17
活発に活動できる		.03	.13	.01	.01	.70	-.06	.30	.05	-.03	.04	-.06	-.39
新しい発見出合いがある		-.15	-.04	-.02	.15	.48	.10	.15	.24	.15	-.09	-.01	-.16
とてもい雰囲気だ		-.05	-.07	.15	.26	.47	-.01	-.11	-.11	.10	-.02	.05	.22
第6因子：地域との紐帯													
地域とのつながりを感じる		-.04	.00	-.01	.00	.09	.92	.01	.03	-.05	-.05	.02	.05
地域の情報が集まる		.02	.00	.02	-.02	.06	.88	-.01	.05	-.03	-.01	.01	.04
地域とのかかわりがある		.04	.01	-.01	.06	.03	.87	-.06	-.01	-.05	.11	-.07	.05
第7因子：自己有用感													
自分に役割があると感じる		.17	-.11	.00	-.02	-.04	-.04	.83	.00	-.02	.03	.10	.09
自分が役に立っているときがあると感じる		.24	-.15	.00	-.08	-.03	.01	.81	-.02	-.02	.02	.15	.10
自分を必要としてくれる		.22	-.15	.02	-.05	.02	-.02	.75	-.08	-.03	.02	.11	.15
自分の能力を発揮できる		.12	.14	-.02	.01	.01	-.01	.65	.02	-.04	.07	-.09	.12
第8因子：多様性													
いろいろな人がいる		.06	-.02	.00	-.06	.02	.03	-.04	.81	.06	.02	.14	.06
いろいろな人に接することができる		.28	-.01	-.03	.02	.08	.03	-.02	.74	.04	-.02	.06	-.09
第9因子：思考できる環境													
頭の中を整理できる		.07	.16	.00	-.07	.07	.07	-.05	-.03	.03	.85	.02	-.12
物思いにふけることがある		-.01	.23	-.02	-.04	.10	-.03	-.03	.04	.71	-.05	.02	.03
頭の切り替えができる		-.02	.09	.04	.06	.19	-.04	-.04	.07	.64	.10	-.14	.12
第10因子：アクセスの良さ													
近い		-.02	.03	.00	-.06	-.02	.06	.10	.00	.05	.87	-.01	-.01
アクセスがいい		-.02	.02	.00	.07	.04	-.01	.03	.01	.00	.85	.02	-.07
第11因子：入りやすい環境													
フラットな気軽に入れる		-.04	.13	.02	-.03	.15	.04	.06	.14	-.07	.05	.64	-.01
いつでもいい		.01	.26	.05	.06	.10	-.03	.09	-.09	-.16	-.01	.63	-.02
理由もなく入られる		.04	.13	.04	.14	-.01	-.06	.11	.04	-.02	-.06	.57	.10
第12因子：自己本来感													
無理をしないでいられる		.13	.11	.09	-.03	-.08	.06	.18	.03	.10	-.01	.06	.58
素直になれる		.15	.07	.00	.08	.00	.03	.35	-.03	.09	-.05	-.05	.51
ありのままの自分が出せる		.15	.12	-.01	.04	-.04	.02	.41	-.01	.00	-.04	-.03	.51
因子寄与率													
累積寄与率		.16	.11	.11	.10	.10	.10	.04	.07	.04	.03	.05	.04
		.16	.28	.38	.48	.58	.63	.69	.73	.77	.80	.84	.88

表-11 クラスター分析結果

クラスター内での割合(%)							
クラスター	1 一人で リラックス	2 一人で 仕事・勉 強	3 濃密な 仲間でに ぎやか	4 気軽な 仲間でし つとり	5 心の居 場所	6 実家帰 省	7 誰にも 邪魔され たくない
n	166	141	48	88	71	40	28
性別	男性	38	76	81	38	14	53
	女性	62	24	19	63	86	48
年代	20代	14	27	23	14	41	0
	30代	0	44	0	35	15	45
	40代	15	23	31	15	0	55
	50代	37	0	19	19	28	0
	60代	34	6	27	17	15	0
場所	実家・親戚宅	0	3	0	0	39	45
	友人・恋人宅	0	2	0	0	46	28
	別荘	0	1	0	0	3	5
	自動車・バイク	0	11	0	0	11	23
	喫茶店・カフェ	23	26	4	18	0	0
	居酒屋・バー・クラブ	6	4	27	25	0	0
	レストラン	2	4	2	8	0	0
	小売店	2	5	2	1	0	0
	図書館	17	12	4	2	0	0
	公共施設(図書館以外)	1	0	4	3	0	0
	公園	4	6	2	2	0	0
	入浴施設	0	1	0	3	0	0
	趣味・サークル・稽古事	11	2	25	13	0	0
	体育関連施設	7	6	15	5	0	0
	映画館・劇場	6	1	0	5	0	0
	レジャー施設等	2	0	2	5	0	0
	パチンコ等	1	4	0	0	0	0
	ネットカフェ・カラオケ等	5	4	2	1	0	0
	教会・寺社	1	1	0	1	0	0
	鉄道・駅	3	2	0	0	0	0
	その他	9	6	10	8	0	0
交流	交流なし	100	100	0	0	28	43
	交流あり	0	0	100	100	72	58

居場所感因子得点							
クラスター	1	2	3	4	5	6	7
居場所感因子	被受容感	●	●	○	○	○	
	自由感			●	●	●	
	リラックス感		●			○	○
	愛着感	●	●	○		○	○
	活気		●	○	○	○	
	地域との紐帯			○			●
	自己有用感	●	●	○	●	○	○
	多様性		●	○	○	●	●
	思考できる環境			●	●	●	
	アクセスの良さ	○			●	●	●
	入りやすい環境			●		○	○
	自己本来感		●			○	

○	0.6以上	●	-0.6以下
○	0.4以上	●	-0.4以下
○	0.2以上	●	-0.2以下

であると定義するとともに、居場所を「空間の支配度」軸によって「テリトリー」か「非テリトリー」か、「他者との関わり」軸によって「交流」か「隔離」かに分け、「テリトリー×個人的居場所」、「非テリトリー×個人的居場所」、「テリトリー×社会的居場所」、「非テリトリー×社会的居場所」の4つに分類している。

空間の支配度については、表-8に示すように場所の用途に基づいて分類した。この際、場所の用途の「自然景観」、「インターネット上」、「その他」については判断が難しいため分析から外しているが、「その他」の中でパブリックかプライベートかの判断がつく回答に限り一部、分析に含めている。

交流の有無については、表-9に示すように、居場所における人数についての質問と、理由についての質問の選択肢「人に会いたい・話をしたいとき」という項目に対する回答から判断した。人数についての質問に対して「1人」と答えており、かつ「人に会いたい・話をしたいとき」という項目を選択していない場合にのみ「交流無し」とし、それ以外を全て「交流有り」と判断した。

居場所感因子得点については、まず潜在因子の構造を確かめるため、3.(1), b)で作成した居場所感尺度78項目の回答結果について因子分析(主因子法・promax回転)を行った。固有値が1以上の基準を設け、因子負荷量0.4未満の質問項目を削除して分析を繰り返した結果、最終的に12因子、68の質問項目を採用した。各因子の質問項目の内容から、共通の潜在因子として考えられる名称を推測し因子名とした。これを居場所感因子とする。因子分析の結果を表-10に示す。

次に、性別×年代×場所の用途/空間の支配度×交流の有無の組み合わせによって回答者を分類し、それぞれの居場所感因子得点を基にクラスター分析(階層的な手法、word法)を行う。回答者の分類方法については様々なパターンによる探索的な分析を行った。最終的には、性別×年代×空間の支配度×交流の有無によって回答者を40に分類し、クラスター分析によって8分類となる結果を採用した。

結果を表-11に示す。第8クラスターについては、n=3と非常に少ないサンプル数になったため、結果からは除外している。

第1クラスターから第4クラスターまではパブリックな居場所である。第1、第2クラスターは共に人との交流が無い居場所だが、両者を比較すると、活気、被受容感、自己本来感の因子得点が異なり、それぞれ第1クラスターの方が高くなっている。よって第1クラスターを「一人でのんびりタイプ」とした。喫茶店、カフェ、図書館、趣味、サークルの場が多く、特に50～60代に好まれる傾向がある。一方、第2クラスターは「一人で仕事・勉強タイプ」と解釈した。具体的な居場所としては喫茶店、

カフェ、図書館、自動車、バイクが多く、特に男性、30～40代に好まれる傾向がある。

第3、第4クラスターは共に人との交流がある居場所だが、両者を比較すると、愛着感、活気、自己有用感の因子得点は、第3クラスターの方が高いため、交流する仲間との関係性が濃密であると考えられる。ここから第3クラスターを「濃密な仲間でにぎやかタイプ」とした。居酒屋、バー、趣味、サークルの場、体育関連施設が多く、特に男性に好まれる傾向がある。これに対して第4クラスターを「気軽な仲間でしっとりタイプ」と解釈した。居酒屋、バー、喫茶店、カフェ、趣味、サークルの場が多い。

第5クラスター以降はプライベートな居場所である。第5クラスターは、友人、恋人宅、実家、親戚宅で、人との交流がある場合が多い。被受容感、リラックス感、自己有用感、自己本来感因子が高いため、心の底から落ち着くことが出来るという意味で「心の居場所」タイプとした。このタイプの居場所を好むのはほとんどが女性である。

第6クラスターは、「心の居場所タイプ」と同様に実家、親戚宅、友人、恋人宅、が多いが、被受容感、リラックス感、自己有用感、自己本来感、自由感因子が低く、「心の居場所タイプ」に比べ、人間関係などに心理的な縛りがあると考えられる。また年代は30代と40代に限られることから、心は休まらないこともあるが形式上は居場所である「実家帰省タイプ」と解釈した。

第7クラスターは、自動車、バイク、実家、親戚宅、友人、恋人宅が多く、因子得点については「心の居場所タイプ」に比べて全体的に低いが、大きな特徴は見られない。そこで、プライベートな場所であり、かつ人との交流は無い場合が多いことから、自宅の居場所感に近いものであると考え「誰にも邪魔されたくないタイプ」と解釈した。特に50代に好まれる傾向がある。

(4) 「まちなかの居場所」の類型化と生活の質・地域への意識との関係性

これら7種類に分類した居場所と、生活の質・地域への意識との関係性について明らかにする。まちなかに居場所が無いと回答した群と、7種類それぞれの居場所を選んだ群との間で、生活の質・地域への意識に関する各指標についての分散分析と、Tukey法による一対比較を行った。結果を表-12に示す。第1クラスター（一人でリラックスタイプ）では、地域愛着以外のすべての指標で、まちなかの居場所が無い群との有意差が見られた。また、第4クラスター（気軽な仲間でしっとりタイプ）では、生活満足度以外のすべての指標で、居場所が無い群との有意差が見られた。また第5クラスター（心の居場所タイプ）では、風土接触量のみ、居場所が無い群と

表-12 分散分析結果

		平均値				
	n	生活満足度	人生満足度	地域愛着	風土接触量	地域疎外感
1 一人でリラックス	166	4.75	3.86	3.64	2.67	2.28
2 一人で仕事・勉強	141	4.29	3.52	3.43	2.33	2.49
3 濃密な仲間でにぎやか	48	4.19	3.49	3.68	2.64	2.36
4 気軽な仲間でしっとり	88	4.65	3.92	3.77	2.88	2.29
5 心の居場所	71	4.45	3.78	3.52	2.65	2.50
6 実家帰省	40	4.60	3.68	3.62	2.64	2.22
7 誰にも邪魔されたくない	28	3.89	3.24	3.52	2.75	2.39
まちなかの居場所無し	748	4.14	3.39	3.50	2.22	2.49
F値		4.65**	4.68**	2.47*	8.37**	4.85**
Tukey法		無*	無*	無*	無*	1.4*
		<1	<1.4	<4	<1.45	<無

**p<.01,*p<.05

の有意差が見られた。いずれも、居場所が無い群に比べ、生活の質・地域への意識が良好であることを示している。

第1クラスター（一人でリラックスタイプ）と第4クラスター（気軽な仲間でしっとりタイプ）は、どちらもパブリックな性質を持つ居場所であるという点で共通している。そのうち交流の無い居場所では、第1クラスター（一人でリラックスタイプ）でのみ生活の質が高い傾向にある。第1クラスターは活気、被受容感、自己本来感が第2クラスターと比べ高いという特徴があった。このため交流が無い居場所の場合は、一人で過ごすことが「本来の自分で居られる」という感覚に繋がり、かつ、「この場所は自分を受け入れてくれている」「自分はこの場所に溶け込んでいる」といった感覚を持てるような居場所で、生活の質が高くなる可能性があると考えられる。また交流がある居場所では、第4クラスター（気軽な仲間でしっとりタイプ）でのみ、生活の質が高い傾向が見られる。第4クラスターは愛着感、活気、自己有用感が第3クラスターと比べ低いという特徴がある。よって他者との交流がある居場所の場合は、仲間と賑やかに騒ぐよりも、気軽な友人などと、しっとり落ち着いて話せるような居場所を持つ人は、生活の質が高くなる可能性があると考えられる。

5. おわりに

本研究では、自宅や職場、学校以外に「居場所」と認知できる場所を「まちなかの居場所」と定義し、まちなかの居場所と人々の生活の質との関係性を明らかにすることを目的として、居場所に関するアンケート調査を行った。その結果、まちなかで居場所と認知できる場所が存在することは、その人の生活の質・地域への意識にポ

ジティブな影響を与えている可能性が示された。特に、喫茶店や居酒屋といった飲食店や、友人・親戚宅、図書館、マイカー、趣味や稽古事の場が、多くの人にまちなかの居場所として認知されていることが示された。またこれらの居場所を、居場所から感じる心理的な特徴から7種類の居場所に分類し、人々の生活の質との関係性を比較した。その結果、「一人でリラックスタイプ」と「気軽な仲間ですっきりタイプ」の居場所で、生活の質が高い傾向にあることが示された。

以上の結果から総合的に考察する。

本研究で分類された「濃密な仲間でにぎやかタイプ」と「気軽な仲間ですっきりタイプ」は、「サード・プレイス」に近いタイプの居場所であると考えられる。生活の質が高いのは、このような「サード・プレイス」に近いタイプの居場所を持つ人々であろうと筆者らは予想していた。しかし「濃密な仲間でにぎやかタイプ」の様に活気や多様性のある居場所を持つ人々の生活の質が高いとは必ずしも言えず、むしろ特に突出した特徴を持たない「気軽な仲間ですっきりタイプ」における生活の質が比較的高いという結果に注目すべきである。また、「気軽な仲間ですっきりタイプ」は「濃密な仲間でにぎやかタイプ」に比べ地域愛着、風土接触量が高く、地域疎外感が低い傾向にあり、これらが人生満足度につながっている可能性も考えられる。しかしながら具体的な因果関係や他の関連する要因については不明である。

また、人との交流が無い居場所であっても、本来の自分が受け入れられているという感覚を持てる「一人でリラックスタイプ」の居場所では、人々の生活の質が高いという結果が示されている。この結果を考察する上では、本研究の対象者が東京23区在住者であることを鑑みると、萩原、中井(2009)で述べられているように、監視社会化、規制社会化した都市から逃避したいという生理的欲求が、カフェの個室空間（ネットカフェなど）の普及につながっているのではないかという指摘が参考になるかもしれない。都市の均質化、コミュニティの希薄化に対する、「サード・プレイス」的な居場所の要請と同時に、都市の監視社会化、規制社会化に対する、「都市の個室化」的な居場所の要請が存在するという事が、本研究の結果に反映されている可能性も考えられる。

いずれにせよ本研究では、自宅や職場ではなく、特に「まちなか」における居場所の存在が、その人の生活の質・地域への意識にポジティブな影響を与えている可能性が示された。その因果関係や本質的な要因については明らかに出来ていないため、今後の課題としたい。

参考文献

1) 国土交通省：中心市街地活性化のまちづくりホームページ，<http://www.mlit.go.jp/crd/index/pamphlet/01/index.html>

- 2) 日本建築学会：まちなかの居場所 まちなかの居場所をみつかる／つくる，東洋書店，2010。
- 3) Oldenburg, R.: *The Great Good Place*, Paragon House, 1989.
- 4) 林田大作，舟橋國男，木多道宏：職場周囲に構築される「サードプレイス」に関する研究－神田地域・品川地域の比較分析－，都市計画論文集，Vol.38，pp.433-438，2003。
- 5) 斎尾直子，長谷夏哉：都市における児童の居場所づくりの多様化と安全安心－豊かな空間確保両立についての考察－子ども達の放課後の居場所づくりに関する研究，日本建築学会計画系論文集，第614号，pp.33-39，2007。
- 6) 十左近佑里，林田大作：まちなかに構築される居場所に関する研究－和歌山大学・鹿児島大学・金沢大学の学生を対象として，日本建築学会学術講演梗概集E-1，pp.757-758，2010。
- 7) 井川勇，高田光雄，三浦研：サードプレイスの概念からみたカフェ空間に関する考察－京都市都心部におけるカフェ空間の実態調査を通して，日本建築学会学術講演梗概集F-1，pp.515-516，2005。
- 8) 丹羽由佳理，佐野友紀：勉強や仕事を目的としたサードプレイスとしてのカフェ利用に関する実態調査，日本建築学会学術講演梗概集E-1，pp.831-832，2011。
- 9) 萩原知子，中井祐：現代における都市の個室化現象の意味に関する試論－仕切られたい私たちの居場所論－，景観・デザイン研究講演集，Vol.5，pp.221-226，2009。
- 10) 石本雄真：居場所概念の普及およびその研究と課題，神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，第3巻第1号，2009。
- 11) 田中麻貴，田嶋誠一：中学生における居場所に関する研究，九州大学心理学研究，第5巻，pp.219-228，2004。
- 12) 則定百合子：青年期における心理的居場所感の構造と機能に関する実証的研究，神戸大学大学院総合人間科学研究科博士論文-学術，甲4275，2007。
- 13) 杉本希映，庄司一子：「居場所」の心理的機能とその発達の変化，教育心理学研究，Vol.54，pp.289-299，2006。
- 14) 石本雄真，齋藤誠一：中学生の生活が居場所感に与える影響について，神戸大学発達科学部研究紀要，Vol.14，No.2，pp.1-6，2007。
- 15) 石本雄真：居場所感に関連する大学生の生活の側面，神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，Vol.2，No.1，pp.1-6，2008。
- 16) 中村総市郎：大学生における「居場所」と精神的健康に関する研究，創価大学大学院紀要，Vol.30，pp.309-358，2008。
- 17) 宮下敏恵，石川もよ子：小学校・中学校における心の居場所に関する研究，上越教育大学研究紀要，第24巻第2号，2005。
- 18) 石塚昌保：「協働型居場所づくり尺度」の開発，多文化協働実践研究，Vol.13，pp.31-52，2011。
- 19) Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J. and Griffin, S.: The Satisfaction With Life Scale, *Journal of Personality Assessment*, Vol. 49, No.1, 1985.
- 20) 角野善司：人生に対する満足尺度日本版作成の試み，

- 日本教育心理学会総会発表論文集, Vol.36, pp.192, 1994.
- 21) 大谷華, 芳賀繁: 地域交通環境の利用が高齢住民の地域感情に及ぼす影響, 立教大学心理学研究, Vol.45, pp.1-9, 2003.
- 22) 萩原剛, 藤井聡: 交通行動が地域愛着に与える影響に関する分析, 土木計画学研究・講演集, Vol.32, 2005.
- 23) 羽鳥剛史, 中野剛志, 藤井聡: ナショナルリズムと市民社会の調和的關係についての実証的研究, 人間環境学研究, Vol.8, No.2, pp.163-168, 2010.
- 24) 中島喜代子, 廣出円, 小長井明美: 「居場所」概念の検討, 三重大学教育学部研究紀要, 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学, Vol.58, pp.77-97, 2007.
- 25) 藤竹暁: 居場所を考える 藤竹暁編「現代人の居場所」(「現代のエスプリ」: 生活文化シリーズ 3), pp.47-57, 至文堂, 2000.
- 26) 住田正樹: 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在, pp.3-14, 九州大学出版会, 2003.
- (2013.2.25 受付)

A STUDY ON THE EFFECT OF THE “IBASHO” IN URBAN AREAS ON A RELATIONSHIP WITH THE AWARENESS FOR COMMUNITY AND THE QUALITY OF LIFE

Ryunosuke KAWAMURA and Ayako TANIGUCHI

In this study, we focused on the place recognized as “ibasho” in urban areas except a residence, office and school. The purpose of this study was to examine the relationship between the “ibasho” and a quality of life (QOL) or awareness for community (e.g. place attachment), and to classify the “ibasho”.

We conducted a questionnaire survey on the internet to examine whether to have the “ibasho” or not, and QOL scales, awareness for community scales and “ibasho” scales developed in reference to preceding studies.

Results showed that the eating place and friend's or relative's house and library was more recognized as “ibasho” and that people who had “ibasho” had a significant positive effect on the QOL and awareness for community. furthermore, we classified the “ibasho” into seven types by characteristic of “ibasho” scales.